

熱と戦いながらの長い苦闘生活だったのである。そうしてやっとこの苦しみから解放されて、この収容所を出て自由の身となったのは九月二十日だった。

禍福はあざなえる縄

兵庫県 松本和子

昭和十四年三月、小樽高女を卒業。北支、満州開拓の政策にそって、札幌鉄道局管区より三千人の募集があり、希望を持って、勇躍渡満を決意し、十二月三十日南小樽駅を出発しました。ハルビン満鉄鉄道局、北安駅勤務を命ぜられ、新京に到着したのが昭和十五年一月十日。例年のない酷寒で、零下四十度。北海道の寒さに馴れているとはいえ、それこそ凍るような思いでした。ハルビンの大和ホテルに一泊、翌日北安につきました。当時ハルビン、北安間は十時間かかりました。妹はハルビンの女学校で、満鉄社員家族寮。私はすることもなく、北安駅長宅に住込み女中で一年つとめました。その後、

関東軍第四軍軍司令部経理部勤務になりました。渡満してからの人生はめまぐるしく変わりました。終戦と同時に暴動にあたり強奪にあたり、雨期でしたので、身動きもできず、窓に板をはりつけ、玄関を釘づけにし、炊事もできず、缶詰ばかり食べて陽の目もみず、靴をはいたまま、今日は死のうか、明日は自決しようか、と生きた心地がしませんでした。毎日、軍人宿舎や官舎からの自決、放火で火の手が遠く上がり、恐ろしい毎日でした。北安駅上空にソ連機がきて、機銃掃射で、防空壕を狙い打ちしました。操縦士の顔が見えるほどの低空で、私どもも机の下に入って難を逃れました。黒河、孫呉から避難してきた親子三人も私どもの社宅に同居しました。それから十一月まで北安の社宅にいる間、三回もソ連軍兵士におそわれました。家をたたきこわして、六尺近い大男が五人も乱入し、父を裸にして、銃をつきつけ家宅搜索し大型トランク三個にぎっしりつめ、私の嫁入りのひじりめんの長襦袢をひろげてハラシヨールハラシヨールとさげんでいました。父の手拭いの巾の文字をみて、ドイツのゲルマンといって銃をつきつけ、母は手を

合わせ、説明のしようもなく、本当に恐ろしい目に合いました。

二度三度もソ連兵に入られ、危険を感じた私（二十四歳）と妹（十九歳）は丸坊主に髪を刈り、ロイド眼鏡をかけて男装しました。彼らは、畳を上げて、床下まで調べました。生きた心地がしません。雨期が終わっていいよ北安脱出が決まってからは、父は満人によくしていましたので、つきつぎに日本札をおせん別に持ってきて、お名残りを惜しんで送ってくれました。

貨物列車に乗り、何日かかったやら、奉天の満鉄の社宅に集結しました。六畳一間に私も親子五人と中野家三人と八人、七か月間寝起きました。父は、大工として皇屯駅につとめ、何がしかのお給料をもらってきました。私と母と妹は満人に雇われて、露天商の店で働きました。避難民は早く帰宅できるということで顔に鍋スミをぬり、きたない服を着て、引揚げ船に乗る、錦州のコロ島に向けて、奉天を出るとき、一つしかないリュックを奪われてしまいました。まったく人生波乱万丈でした。

昭和二十一年六月二十二日、舞鶴上陸。全身DDTをあげせられ、プールのようなお風呂に入れられました。

主人（軍人。十八年一月に結婚。七月二十日戦死）の実家に私も親子五人ころがりこみました。

二十一年十二月二十一日、南海大地震に見まれ、津波で家ごと流され、父と妹は九死に一生を得て助けられました。母はついに死体もあがらず、行方不明になってしまいました。葬式も出せず、死後二十三年目に始めて法要供養しました。二十一年十一月に再婚。「塩タキ」などして、電気もなく、ランプの海岸の塩タキ小屋で暮らしました。ほんとうに敗戦の悲惨さは引揚げ者でなければわからないと思います。

さつまいもの弁当

高知県 田辺 昌亮

終戦二年目の春だったように思います。やっとの思いで、母を頭に姉二人、そして私と弟、二人の妹計七人